

特集 〈笑う〉

「笑う」「こと」、「泣く」「こと」

— 保育園生活の中から —



杉本さおり

「ばあば、ばあば……、あっち行くー」。

保育園中にひびくような大きな声で、まなが泣いている。顔中、涙と鼻水とでぐちゃぐちゃだが、それを拭いてやろうとするのも嫌がり、全身で抵抗している。

まなは一歳六ヶ月。核家族で、今まで母親とべったり生活していたが、母親が病気で緊急入院してしまったため、急に保育園への入園が決まった。定員はすでにいっぱいひよこ組（〇、一歳児）だったが、緊急措置児としてまなも仲間入りすることに

なった。

第一日目の朝、近くにすむ祖母がまなを連れて登園。まなは、初めて目にするおもちやに惹かれ、あつさりと入室してくる。調子よく遊び始めたので、そつと祖母は帰つたのだが、しばらくして祖母がいないのに気づくと、冒頭のような大泣きが始まつてしまつたのだ。

ひよこ組の担任保育は二人。はじめまなの大泣きに圧倒されていた他の子どもたちも、つられて泣き出したり、不安から保育の膝を取り合つたり……とだんだん混乱してくる。クラスの中をどうおさめていこうか、どうやったら落ち着くのかとあれこれ考える。一人をおんぶし一人を抱っこ、余つた手をまなの方へ向けても、泣きやむはずも、膝へ入ってくるはずもなく、私もだんだん焦つてくる。仕方なく、私はまなを連れて部屋を出る。A保育に任せた他の子どもたちが落ち着くまで、園庭を散歩したりしたのでしたが、その間もまなは泣き続ける。花を

摘んで渡しても「イヤ!」、朝のおやつも「イヤ!」と拒否され続け、またクラスに残してきた他の子どもたちも気にかかり、しつくりとまなと関われないまま、時間だけが過ぎていってしまう。

結局一日目は、その後園長が一人乗りのベビーカーに乗せて、半日まなにつきあつてくれ（それでも泣きやむことはなかったのだが）、祖母に事情を伝え、半日でお迎えに来てもらうことになった。

一日目の午睡時間中、私とA保育と二人で、まなと、これからのように関わっていかうかと話をした。

- ・まなにも、他のひよこ組の子どもたちにも、できるだけがまんや無理をさせないこと
- ・まなが不安で泣くのは無理もないのだから、それをおさえようとしないうこと
- ・何かひとつでも、まなが安心できるもの（人、場所）をみつけること

雑談まじりの話をしながら、二人でこのことを確

認した最後にA保母が言った。

「明日、ちよつぱりでも笑ってくれるといいね」。

ああ、そうだ、と思つた。泣くのは仕方がないと思つてはいても、どこかでその拒否的な意味を感じていたのだつた。拒否されるのは保育者としても、一人の人間としても辛い。こんなに心を碎いて、まなをわかつて、受け入れてあげようとしているつもりなのに、どうして泣くの、どうしてわかつてくれないの、と心のどこかで思つていたのだと思う。だから反対に「笑ってくれるといいね」と言われた時、笑うまながほつと心を開いてくれる、こちらの働きかけを受け入れてくれるとわかる瞬間を、保育者である私も待ち望んでゐることに気づいたのだつた。

二日目の朝、泣いているまなを抱き取つての登園となる。この日も半日はほほ泣き続けていたが、クラスの子どもたちは比較的落ち着いていて、よく遊び、よく笑う。まなが他の子の様子を見ていく

れるといいなあと思ひながら半日を過ごした。

三日目も泣いて一日が始まるが、まなは三十分程抱っこされながら泣いた後、ふと泣きやみ、近くのおもちゃを見ている。私がさりげなくひとつ取つて渡すと、まなは受け取つて手に握りしめた。三日目にして初めてである。園のおやつも、おもちゃも、何一つ受け入れなかつたまなが、こちらが渡したものを受け取つてくれた。そして、そのまま私の膝の中で座つている。

「やった！」と私は心の中で思ひながら、そしらぬふりであるが、嬉しさは表情に出てくる。自然と笑顔になる。その直後、またまなが思い出したように泣き出しても、私には「さつき受け入れてくれたんだ」という余裕があり、まなの「泣きたい気持ち」を一日目とは違つてしつかり受けとめられたように思う。

三日目以降、まだまだ泣いて、「イヤ」のまなであるが、変わつていく様子が目に見えて出てきた。

保母の膝を離れて好きなおもちゃを取りに行き、手に持って笑顔になったり、歌にあわせて歌うように声を出したり、時には自分からカーテンの蔭へ隠れ、「いない、ない、ばあ！」とにっこり笑顔で出てくることもある。そんな様子に、保母も心から嬉しく思い笑顔になる。他の子どもたちにも穏やかな雰囲気伝わることか、ゆつたりとした時間が流れていく。

小さな子どもたちにとって、見知らぬ場所で、見知らぬ人と一日を過ごすことは大きな困難であると思う。「四月になったら保育園だね」とあらかじめ「ことば」で知らされていたとしても、一歳ちよつとの子どもが理解できているとは思えない。子どもは、保育園生活という新しい環境の中に入って初めて、全身でその環境を受け入れられないかなければならない。「ことば」でうまく表現できない代わりに、泣いて、拒否して、怒って、自分の感情をこちらに伝えてくる。それを受けとめる保育者も、「ことば」

ではなく、全身で応えていかなければならない。いろいろなものを差し出しながら、同時に（大丈夫だよ。安心して。楽しくなるよ）等々、心を伝えようとす。そんな心と心のぶつかり合いの中で、子どもが見せる瞬間の笑顔の中に、少しでも気持ちが伝わっていることを確認することができ、保育者も嬉しくなる。

保育園の一日の中で、子どもは泣いたり、笑ったり、気持ちをぶつけて生活している。その気持ちをどう受けとめ、応えていくかが毎日の保育者の生活であると思う。「笑って」一日を過ごすのにこしたことはないけれど、「泣く」ことを拒否するのではなく、それもしつかり受けとめられる保育をしていきたいと思っている。

（静岡県公立保育園）